

政治意識の構造的分析の一つの試論：政治思想史研究方法によせて

竹原, 良文
九州大学法学部教授

<https://doi.org/10.15017/1357>

出版情報：法政研究. 25 (2/4), pp.367-380, 1959-03-05. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

政治意識の構造的分析の一つの試論

— 政治思想史研究方法によせて —

竹 原 良 文

政治学界の最近の動向の中でもっとも著しい傾向は（現実の政治運動と連関して現れて来ていることが明かであるが）、研究方法の反省と再検討が強く要求せられている点であろう。従来の政治学方法論が切実な現実問題の解決に具体的に答えることができないし、効率少いものとなっていること、隣接科学が問題としている、急激に変動している現代文明が生み出す社会的衝撃を、政治学は受けとめようとしないうし、その問題に答えることができないこと、そこに反省の根拠が求められるであろう。少なくとも社会構造論、イデオロギー論が、政治現象の巨視的実体把握に努めながら、きわめて急速に変動する運動現象を充分にとらえ得ないし、むしろ客観的事実を重視しないで、あくまで演繹的方法を固守したところに、機能主義的アメリカ政治学の影響によるものでもあろうが、帰納的・実証的・機能的・心理的側面が強調せられるようになった根拠があるのだろう。これらの研究方法の中から何が正しいものであるかを見出すことは、政治科学をさらに発展させて行く上にきわめて重要である。

このような課題に答える一つの方法は、哲学史、認識論史、科学史との連関において、人間の認識構造の進化の跡をたどることであろう。自然・社会に関する人間の知識・思想の進歩は、客観的環境を自らの認識に適応せしめることによって、その内容を豊かにするとともに、その認識の道具—範疇・論理・思考方法をもつねに新しい、進んだも

のに変革して行くし、またそうしなければならぬ。政治思想史研究の重点は、現代という、過去から未来への進化の一断面において、何が正しい政治の方向であるかという理論的課題と関連して、一定の歴史的時点における認識構造の形成過程を發展史的に究明することであろう。単に歴史的事実からの類推によって現代の運動方向を判断するのではなく、一定の時点における政治的運動の錯雑した諸形態、諸方向の中から、歴史を前進させた意識形態が、どんな物質的根拠、環境の中で形成されたかを追求することは、現代に立って未来を望むとき、思考方法に對しきわめて重要な展望を与えるにちがいない。現代資本主義が、第二次大戦後のオートメーション化の發達にともなうて、質的変容をこうむりつつあることが指摘せられているとき、マヌファクチュア、産業革命の發展過程がもたらした社会意識、したがってまた政治思想の変革過程の分析は、現代政治理論とも密接な関係をもっているにちがいない。

この小稿はこのような重要な課題に答え得るものではないし、またそれを企図しているものでもない。私はここでは、いま述べたような視点から、政治思想史研究の前提として、認識論の問題点を要約するに止めたい。

社会現象、特に、物質的諸関係と密接な連関をもっている經濟現象とは相異った特殊性をもっている政治現象を対象とする認識、科学の在り方が問題となるとき、このような対象領域の特殊性を根拠として、それに対応する認識方法、思考作用の独自性が存すると考えるべきか、どうか。自然現象を対象とする自然科学と社会現象を対象とする社会乃至人文科学を区別する場合、対象の質的相異から、自然認識と社会認識の本質的差異を強調することは、哲学史的にも有力であった。イギリス經驗哲学、フランス啓蒙哲学の一般的傾向は、方法二元論の立場に立っていたし、新カント学派の方法論もまた、社会的認識が価値判断を本質的とすることを強調することによって、自然認識との差異を重視した。倫理・法規範意識は、物質の運動法則の認識とは明かに本質的に異っている。価値判断を根拠とする実践意識は、殊に政治の世界においては、極めて特殊な相を示しているように思われる。権力、地位、名譽、利害、生

命、自由に対する衝動的意欲、打算的判断、創造的行動が錯雑した社会現象の微視的断面を形成している。マキアヴェリが明かにした政治人間像は特殊な観察道具をもってしなければ、その急激に変化して行く運動をとらえることはできないほどであろう。一定の『理想型』、『パターン』を設定することによって、実体的解釈ができない、理解困難な現象を統一的に説明する機能概念を構成することも必要かも知れない。そのような方法から思惟経済、思考の有効性を期待する試みがなされているところに現代社会科学の新しい傾向を見出すことができる。

しかし問題は、対象の特殊性に対応した特殊な認識方法を提起することによって、普遍的認識との相互連関を失い、主観的判断におち入る危険である。価値判断の客観的根拠の正しい把握、実体的理解を欠くとき、その認識は客体から遊離して、現象の単純な記述に終らざるを得ない。価値意識を社会の歴史的構造と連関させて把握しようとする知識社会学乃至イデオロギー論の認識方法は、旧来の形式的・主知的方法への批判だった。認識が存在と立場の拘束性を蒙っていることを主張するこの見解は、思想史の科学的分析を可能にする一歩であったと言わねばならない。史的唯物論の基本的発想法を撰取することによって、非合理的なものと決断の支配している政治の世界を、客観的、合理的認識のもとに置き、『社会均等化』による相互理解を可能ならしめることをマンハイムは企図した。エートピアの精神形式もまた、このような方法のもとに科学的把握が可能となった。

このように認識の社会歴史的被規定性を明かにするとき、科学的認識もまたこの一般的規定から別であることとはでない。対象の特殊性に対応して、科学方法の特殊性が要求せられることは勿論正しい。しかし科学的認識の基本的要素そのものには何らの区別はあり得ない。自然科学における認識論と、社会科学、政治科学における認識方法とのあいだに本質的差異があるべきではない。対象の特殊性を強調するあまり、方法における基本的要素から遊離し、機能概念による操作にたよることは正しくない。むしろ本質論的理解へ進むべきデータ処理の一段階として考えられる

べきであろう。認識の基本的要素を、この機会に再検討するならば、イデオロギー論が問題にして来た、科学的認識そのものの存在と立場からの拘束性を、もっと物質的基礎にまで立ち入って考究する機会が与えられるであろう。主体と客体の相互連関を単純な相対性的関係、意味論、記号論理に還元する方法がそこで問題にせられるだろう。私は認識論、範疇論、論理学について、特に研究しているわけではないし、認識構造について話すことは、専門外のこととして、ためらわざるを得ない。しかし思想史研究の基礎として、認識過程について入門的に学んだ範囲において、この問題に触れることを許していただきたい。

認識構造が、外部の客体からの刺戟に対する神経系の反応、すなわち感覚から始まることは、認識論史の明らかにして来たところである。このような感覚の本質、客体の運動過程の反映の仕方については、しかしながら、このような感覚論のなかにも、意見の一致を見ることは困難であった。心理的機能の前提としての、神経系の生理的作用の分析は、神経医学の発達なしには、不可能であったであろう。そしてこの点について、私の関心を呼びおこすのは、人間の精神活動を、環境の諸条件と、それに反応する主体の脳皮質の生理機能との、統一的、構造的な理解から、説明しようと試みた、パヴロフとその学派の条件反射—第一信号系と第二信号系（言語条件反射）—の理論である。生物の生理的本能をいわず無条件反射と呼ぶならば、感覚—意識のもっとも端初的要素は高等動物の行動心理に見出される、脳皮質の機能にもとづいた条件反射という精神活動である。一定の拍節をもったメトロノームを信号として食物を与えることを規則的にくりかえした場合、実験対象たる犬は、同一のメトロノームを聞いただけで、唾液分泌の反応を示すことをパヴロフは観察して、このように一定条件に適應する動物の反応現象を条件反射と呼んだのである。高等動物は、外界の環境条件に絶えず適應しなければ、その生存を全うすることはできない。絶えず変化して行く外部の複雑な条件に対して、条件反射の持続的機能を形成して行くことは、生存上全く必要であるが、決して容易ではな

い。しかしこのような条件反射が形成せられることは、人間の場合、外界の客体に対する正しい認識の基本的要素として重要である。

この基本的要素を可能にしているのは、大脳皮質の基本的過程が、興奮と中止（陽性と陰性条件反応）、その拡張と集中運動、その過程の相互誘導をくりかえすことによって、刺戟に対する反射の『分化』を生み、さらに複合刺戟に対応した、構成的系化を形成するところに求められるであろう。内外からの多数の刺戟が陽陰条件反応の拡張Ⅱ集中過程をくりかえすことによって系統化された一種の動的なステレオタイプ、常同的系が主体に形成せられることは、客体の構造、本質の正しい把握を可能としている。このようにして得られた具体的感覚、表象は、言語の媒介によって、抽象的概念にまで高められる。第二信号系、言語条件反射が認識構造に占める重要性に注意せねばならない。このような高等な精神活動については、まだパヴロフ学派においても十分な実証的研究が進められていないことは残念であるが、その成果について期待するところはすこぶる大きい。そして第二信号系によって抽象的概念が形成されたところに、推理・判断の高次の精神活動、認識における第二次的段階、理性的段階（感性的段階に対する）への移行が可能とせられる。

条件反射についてなお注意すべき点は、それが一度系化され、固定化されると、客体の運動、変化に対応して、新しい条件反射を形成することは、テープレコーダーのように簡単にはゆかないことである。客体の運動過程に個体的認識は十分に適應し得ないこと、ゼネレーションによる意識の差が存しうること、これらの事実の生理的根拠はすでにここに示されている。認識の歴史的被制約性が形成される根拠もまたここに求められよう。ベーコンが指摘した『幻影』（idola）は、すでに言語を媒介とするところに、その原因をもつのであろう。観察における偏見、常識を打破することは、客体認識の正しい在り方の基本的条件であろう。マンハイムが、パヴロフの条件反射論に強い

関心をもちながら、^(註)その後の理論の発展の中でその学説をさらに展開せず、言語、マス・コミュニケーション、日常生活心理の中に意識の問題を解消したところに、イデオロギー論の正しい発展を阻止する一つの原因があるのではないだろうか、私は疑う。

(註) K. Mannheim: *Systematic Sociology*. p. 13.

感性的認識(直観)の段階、感覚、表象、概念の整理、記述の段階から、認識構造のより高次の段階、推理、判断、基本的命題への移行、具体から抽象への運動がこうして可能とせられる。客体の運動形態、相互連関、矛盾Ⅱ質量関係等の範疇、命題は、推理・判断のきわめて重要な道具であり、その適用の正しいことを期さねばならない。勿論このことは、論理、三段論法の対象に対する公式的適用を意味するのではなく、むしろ観察の結果得られたデータを処理するにあたって重要な作用をなす思考方法にヒントを与えるという意味である。自然に対する観察がきわめて重要視せられている自然科学においても、科学的成果の半、あるいはそれ以上が哲学的思考に依存していることを、優れた多くの科学者が承認していることに留意せねばならない。思惟における論理(dialectica)の創造性が、事物の法則、本質把握に、いかに重大な要素をなしているかが認められよう。実験的方法とならんで、思弁的方法は、正しい認識、科学的知性を進化させて行く上に重要である。それはいわば車の両輪をなしている。事物の現象に関する十分なデータの収集、観察なしに、あるいはきわめて不満足なデータにもかかわらず、一足飛びに何らかの結論を、間接の経験の固定化されたものとしての、カテゴリー、テーゼからは導き得ない。

ことに範疇、論理は、決してカント哲学におけるア・プリオリではなしに、対象たる物質、事実の運動過程の、相互関係、作用Ⅱ反作用、実体的構造の反映であることに注意せねばならない。幼児の思考過程に形成せられる論理が、事物の構造、弁証法的性質と、密接に連関しつつ発達していることを、心理学的実証的研究の結果立証している

ワロンの成果は、^(註)注目するに値いすると考える。

(註) H. Wallon, *Les origines de la pensée chez l'enfant*. 1947. T. II. conclusion générale

したがって認識の道具としての範疇は、技術手段が絶えず変革され、進歩させられたと同じ意味において、社会の認識が進化させられるのに対応して、それ自身飛躍的に発展する。アリストテレスの範疇論は、ルネッサンス的段階においてベーコンの『ノーズム・オルガナム』によって否定されたし、ニュートン力学体系に対応するカント的範疇論は、近代化学の誕生とともにヘーゲル弁証法によって批判せられた。マルクス・レーニンによって確立された唯物論的弁証法が批判の批判を通して科学方法論の有力な根拠になっていることは言うまでもない。今後原子核物理学、宇宙理論などの展開が、弁証法の諸範疇をどのように発展させてゆくか期待したい。

認識の構造は、このように感覚、表象、概念に出發し、範疇、論理の手段によって、推理、判断を行い、こうして法則的、実体的命題にまで到達する。具体から抽象への帰納方法の上向的過程は、こうして理性的段階をもって一応形成される。しかしこれで認識は完了するわけではない。結論としての命題は、科学方法の場合には、仮説 (Hypothesis) として、演繹的方法、下向的過程の出发点となる。現象の説明、変革がこの本質的、法則的把握から充分答えられることが証明されるとき、この仮説は相対的真理として確認され、体系化される。認識の発展過程は、常にこのようならせん状運動をえがきながら前進している。

個々の人間における認識運動は、多かれ少かれ、このような認識構造の過程をくりかえしている。それを認識の個体発生と考えるならば、人間集団における認識運動の過程は種属発生と呼ぶことができよう。後者の場合もまた社会史的制約を蒙りながら、個体発生の場合と同一のらせん状運動を示していることが、哲学史、科学史の分析によって明らかにせられている。たとえばルネッサンスIIマヌファクチュア段階における自然認識は、天体に関する観測、

記述、個別的判断を内容とするティコ・ブラーエの段階、現象論的段階から、実体的構造、特殊的判断を内容とするケプラー・ガリレイ・スピノザの段階、実体論的段階へ前進する。そして第三の段階として、諸実体の相互作用の法則認識、ニュウトンの普遍的判断の段階、本質論的段階が発展して来る。^(註)政治認識もまたマヌファクチュア段階に対応して、君主権力に対立する単純な人民主権意識、暴力放伐論の段階から、ホッブス・スピノザの段階、自由、権利に対する個人個人の覚醒した意識から出発する社会契約論の段階へ発展し、そしてロック思想はかような意識を現実のものとして実現する。産業革命以後の労働運動の過程もまた *an sich* から *für sich* へ、*für sich* から *an und für sich* への発展をたどっている。

(註) 武谷三男『弁証法の諸問題』(一九五四年) 一二五頁以下。

しかし、認識運動の発展過程は決して、自然発生的に、知識欲という単純な動機から、自己運動して行くといった性質のものではない。偶然の発見、思いつきから、あるいは純粹な論理的思弁から、あるいは知識の単純な伝達、コミュニケーションから、認識が新しい段階へ前進するとは考えられない。ある事物が感覚され、概念によってとらえられるということは、外界からの雑多な刺戟の中から、主体がその現象を選びとっているからにはかならない。認識主体が客体から分離され、客体に対して自らを定立していることが前提とならねばならない。

主体が主体性を確立するということは、個体の認識目的の自覚、意志と連関している。人間の自然・社会に対する働きかけがなければ、現象の認識さえも深化することはない。目的意志に対応して問題設定がなされることが認識の前提条件である。主観的問題意識が先行して、はじめて、客体を見る目が鋭くなり、対象を対象としてとらえることができ、思考の段階に入ることができる。

しかしこのような目的意志が生みだす問題意識の根拠は何処に求めらるべきであろうか。科学理論の論理的、思

弁的追求の結果、理論的不整合が見い出され、行きづまりが生じ、懷疑論におち入る——といった、純論理的過程の中に探しても無駄であろう。既成の知識の体系の中では、諸命題の論理的斉一性、綜合性が主知的に求められるけれども、理論体系の限界は、純粹論理性のわくの中からよりも、むしろその現実との矛盾、背反にあらわれて来る。現実そのものが、固定化された理論、常識化した知性に反逆しはじめる。

問題意識は、かようにして、理論、科学それ自体の中から、あるいは理念それ自体の運動過程の中からではなく、外から、客体の側から、提起されて来る。理論、あるいは仮説は、単に説明、解釈の手段ではなしに、客体に働きかけ、それを現実に変革することによって、検証され、有用なものとなることができる。すなわち広義の実践が、科学理論のみならず、個人個人の認識一般の根拠をなしているようである。この実践の必要、目的の自覚から問題意識は形成せられる。

実践は、自然認識の場合、例えば実験、観察、あるいは実習などのように、認識の不可欠の条件となっている。それを欠いだ教育、学習はほとんど効果をあげることができない。最も重要なことは、客体を変革する労働、生産が、認識を発展させる重要な契機をなしていることである。人間はこのような実践の必要から、客体の本質を追求する意識をもち、認識の過程を開始する。社会的意識についても、生活的実践が社会への認識を深めて行く。現実生活を向上させ、豊かにし、明かるいものにして、とうとする実践的要求が、経済、文化、法律、政治への認識の根拠となっている。実践が認識を媒介していることは明かである。

このように認識の媒介が実践であると言う規定はきわめて重要であるが、実践の正しい把握が必要である。実践主体の、意志、目的の主観的側面を強調する場合、認識の客観性が不当に損われて、客体に何らかの意味を与える、『人間論』へ偏する傾向が見出される。認識の社会歴史的被制約性を、主体的、実践的意志、信念の中に求める『性

格論理』もまた同一の意味論へおち入っている。

これに反して、実践を日常生活の中に解消し、実用性と同一視する考え方もある。プラグマティズム、ことにデュロワイにおいては、有機体としての人間は、環境に適応し、その状況に対応する慣習の中にとけこんでいる。その状況に変化が生じて、欲求満足が妨げられたとき、人間の衝動が目ざめ、慣習の修正のための行動がなされる。人と人との間の問題はコミュニケーションの手段によって、解消せられる。このような実用性によって媒介される認識、科学は結局は日常生活における問題を処理、操作するための態度、方法にほかならない。このような考え方から見れば、概念、論理は、操作のための記号、方式にほかならない。

認識を媒介する実践の問題は、特殊な目的意志、倫理性の強調、あるいは反対に日常性の習慣の中への解消のいづれかではなしに、むしろ社会生活の構造的な理解から把握せられるであろう。社会構造の中で、生産的労働は、もっとも基本的実践である。この実践にささえられて、生産力は維持・増加している。この労働を基本として、人間の手の延長にほかならない道具の出現が可能とせられ、道具を媒介として生産技術の発達が可能となったことは、原始社会の文明社会への移行の過程に示されている。アニミズムの否定、文化の発展は、石器から青銅器への飛躍、技術の前進と連関している。

技術もまた重要な実践である。技術論を（自然）認識論の根拠とする見解は、技術をこのように重視する考え方である。生産技術の定義については、技術論の内部にまだ論争がなされているから、私としては明かな結論をもちえないけれども、技術は生産力の要素として重要な役割をもち、客体の実体的、法則的把握、本質的認識の具体的適用である。この実践過程が絶えず自然認識の問題を提起し、科学思想の発展過程と相互連関している。

このように生産力に直接結合した科学技術思想が、物質的根拠に密着し、人間の進化過程を推進していることは、

注意されねばならない。世界観の前進は、物質観の変革に相対応している。思想、科学の歴史について、技術史を重視せねばならない理由はここにあると言えよう。

このように自然認識は、生産労働・技術を媒介として、絶えず本質的把握を深めているが、社会認識を媒介する経済、法律、政治における実践もまた、構造的に、労働・技術と相互連関をもち、生産力に対する外部条件を形成する人間活動である。ことに経済は生産関係と直接結合している。しかし社会的実践が生産労働から分離され、頭の労働、精神労働として特殊な領域をもたざるを得ないことが、土台に対する上部構造としての性格をもつ根拠となっている。社会的認識が客体の法則的本質的把握から遊離し、むしろ逆倒されたイデオロギー、ユートピア・メンタリテイをもつのは、ここに原因している。

政治の世界は、無数の複雑な中間項の連鎖によって、土台としての生産力に結びついている。特殊な現象形態としての政治的実践を、個性性として、現象論的にとらえるために、特殊な認識操作が方法論上必要なことは認めねばならないと思うが、中間項をその根拠である実体的要素にまで還元して、そこから法則的理解をひきだすための、予備段階としてのみ、意義をもち得るであろう。巨視的、構造的な政治認識が、政治的実践の現象形態の微視的分析に充分役立ち得ないところに、説明的、記述的、実証的方法が要求せられ、それが現代政治学の主要な内容をなすに至ったのであろう。しかし政治認識は、この段階からさらに法則的認識の方向へ深化されねばならない。

以上で一応、実践を媒介する認識構造を論じたつもりである。しかし肝心の政治認識の成立過程について充分検討することはできなかつた。この問題は、哲学史・科学史の研究と密接に関連しながら、政治思想史の分析を進めていくとき、その方法の主要なテーマとなり、政治学原論に科学的根拠を与えるであろう。科学技術の革新が、旧来の物質観、自然認識を根本的に変革するとき、社会認識はそこからどんな衝撃を受け、生産力に対応した生産関係の創造

を目的とする意識内容を引き出して来るのであろうか。このような研究は、現代の政治意識と、戦後の技術革命の問題とのからみ合いを追求する上にも重要なのではないかと私は考える。

第二次大戦後の世界には、第二の産業革命と呼ばれる、生産力の飛躍的発展の時代が始まっている。動力源として、石炭・石油に代って、原子力が現実に産業の面に出現して来た。自動車工業を中心に進められていた企業のオートメーション化は、大戦中に発達したエレクトロニクスを自動制御の手段としてとり入れることが可能とせられたために、広汎に産業一般に採用されはじめた。その結果労働生産性は、アメリカ、ソ連邦において、著しく向上しはじめている。世界史における転換期が到来していることが明かである。社会主義体制においては、その結果労賃の引上げ、労働時間の短縮が可能にせられることによって、共産主義段階への移行の条件が実現せられる。資本主義体制においては、資本主義そのものの質的变化が可能とせられるかも知れない。

このような技術革新は政治意識にどのような変化をもたらすのであろうか。技術革新を基礎づけた科学理論の飛躍的發展は――直接のアナロジーの形態をとることは誤りであると私は考えるが――どんな衝撃を社会認識に加えることによって、社会Ⅱ政治Ⅱ意識を変革してゆくであろうか。ことにコミュニケーションの発展は、その相互接触・交渉を緊密にしつつあるのだから、たとえ社会的対立がコミュニケーションの中に溶けてしまうと考えられないにせよ、社会意識の変革過程は時間的にいよいよ急速にせられるにちがいない。テクノロジーの考え方、あるいはデュウイの見解のように、社会的矛盾の解決を技術万能に求めることは正しくない。あるいは精神状況、雰囲気の問題にすりかえることも誤りであると思う。前進する科学思想のもつ合理主義が、自然認識を通じて、どのような意識形態をもって社会認識の発展と相互に関連するだろうか。政治思想史研究の視点を私はここに置いてみたいと思う。

例えば私が現在研究対象としている近代思想については、マヌファクチュアと、それに関連した科学思想、ガ

リレイ・ニュートンの近代力学が、社会契約論の論理構造の根柢をなしていることが明かである。マヌファクチュアが先行段階における手工業と全く異った労働過程を生み、極めて限られた範囲であるにせよ、機械装置の採用を可能にしたことが、力学の発展を可能とした条件である。ホッブス、スピノーザの政治思想の基礎にある哲学思想は、どのような力学的自然認識の方法の立場と同一の地盤の上に立って、機械的唯物論を生みだしている。自然権は物理的力の類比から考えられている。しかし問題は、自然観が直接社会意識に衝撃を与えるのではなく、生産力の生産関係との矛盾を仲介して、変革されてゆくことであろう。自由民権運動の一翼だった、自然法論、コンモン・ロウの立場からの人民主権論は、マヌファクチュアの発展が生みつつあった社会的変動の余波をうけて、経済的地盤を失いつつあった階層からの反作用の表現であった。ニュートンの力学体系と対応するロックの哲学は、政治思想の上では、ホッブス・スピノーザの社会契約論にもとづきながら、その上に人民主権論を統合統一した見解と言えよう。現象論的人民主権思想は、実体論的社会契約論の出現をまっしてはじめて、ロックの『政府論』の中に綜合体系化せられたと言えよう。現象論的とは、来るべき市民社会への発展的展望をもたない意味においてであり、実体論的とはマヌファクチュア生産力の発展を明かに意識しながら前進的立場に立っていたからである。ロックの政治思想は、マヌファクチュアの生産力の上に構成されるブルジョア民事社会、国家を本質的にとらえていた。彼において労働価値説の萌芽が既に見出されていた。

原子力の生産動力源への導入、エレクトロニクスのフィードバック装置をもったオートメーション化の発展—これら生産力の飛躍的増大の生みだす生産関係への衝撃、政治思想への反作用の中から、何が未来への前進的展望をもった理論となるだろうか。近代のマヌファクチュア、十九世紀初めに開始された産業革命の、政治意識に及ぼした作用・反作用の歴史的研究が現代の問題に何か答えるだろうか。私のこの小稿は研究の成果のレポートではなくして

むしろこれからの研究プランを全くアウトラインにしてここに示したものにほかならない。菊池先生の還暦記念論文集に捧げる原稿としてはまさに汗顔の至りであるが、お許し下されば幸甚である。

参 考 文 献

- 丸山真男、政治の思想と行動、上・下、鶴見俊輔、プラクマティズムの発達概説〔現代思想〔岩波講座〕IV〕、清水幾太郎、プラクマティズムの本質、(同上)、上山春平、問題解決の論理(同上)、市川三郎、分析哲学(同上)、西村勝彦、大衆社会論、中村菊男、政治心理学、日高六郎他、政治と経済の心理学(現代心理学6)・Wells, H. K. Pragmatism. 講座、現代の哲学III、プラクマティズム、山本晴義、プラクマティズム、氷野芳夫、デュロイと現代哲学、今中次磨、政治学方法論の発達(政治学講座、I、上)、上田一雄、イデオロギー論(同上)、Mannheim, K. Ideology and Utopia. Id. Systematic Sociology. 新明正道、イデオロギー論考、坂田太郎、イデオロギー論の系譜、丸山真男、イデオロギー(政治学辞典)、パウロフ選集、上・下、ヤ・ベ・スクリャーロフ、入門条件反射学、レーニン、哲学ノート、毛沢東、実践論、同、矛盾論、アレクサンドロフ、弁証法的唯物論、ガロディ認識論、上・下、黒田寛一、社会観の探究、コンフォース、唯物論と弁証法、武谷三男、弁証法の諸問題、同続弁証法の諸問題、田辺振太郎、唯物論的弁証法の研究、寺沢恒信、弁証法論理学、試論、原光雄、自然弁証法の諸問題、梯 明秀、資本論の弁証法的根拠、フォガラシ、論理学上・下、藤本進治、認識論、松村一人、弁証法とはどういうものか、同、弁証法の発展、ローゼンタール、弁証法、同、資本論の弁証法、同、カテゴリー論、バナール、歴史における科学、I-IV、菅井準一他、科学と科学者、(現代思想VII)・Lilley, S. Automation and Social Progress. (1957.) G・ソール、オートメーション時代。